

●高澤良一 第二句集 ももすずめ

●平成二年

水栽培の鬚根にも年改まり

滑つこき初刷を取り落しけり

高梢に寄生木昇り初日受く

木瓜の枝のこんがらかつて年越せり

ふだん着で通し三日も過ぎにけり

一二枚落葉挟める葉水仙

凍むこゑに電光石火みそさざい

もくれむの凍む枝に雨のぬくとからむ

玄孫弟子やしゃこ亜浪序文を讀初めに

風生風生に「大寒と敵の」とく対したり」の句あればの相手取りたる寒ん迎ふ

碧梧桐忌法外な寒んもたらせり

厚着よりもこと手を出し仏撫づ

みつまたの蒼おつとり日の射せる

オソコロコロセンダリ称へ凍むまじや

紅梅の下土踏めばほこほこと

梅東風に弁財天の膝吹かれ

十二神将一体修復中余寒

黒ずめる連翹の芽に雨つめた

れんげうに笑ひかけらる日も近し

れんげうの葉をもこと解く天気雨

啓蟄やずいと近寄るぶちの鯉

パツパツとさんしゆゆの黄を振撒ける

悪相の紫荊雨まみれなる

茎を曲げ生ふるアネモネ頑に

問診に次いで触診スイトピ―

涅槃圖を二人がかりで懸け了へぬ

エイプリル句集序文賜はるフルと序文締めくくられ

天気雨はらと雀の帷子に

吹き降りの白木蓮を横なぐり
手際よく傘をあづかる甘茶番
よき風の吹き抜けるなり花御堂
愛すべき春の櫂かのその全て
この葉形がたちたしかに破れ傘の花
南畝の忌噓をまことの種として
でで虫の止まる広葉に朝が来て
早起きをしてでで虫の側にゐる
朝方の楓翼果に風湧ける
かみきりにいちじく甘露用意せる
朝顔の種蒔く臍を下にして
けふ夏に入れり櫂の戦ぎぶり
若葉して櫂は杜の明り取
まだ借手つかぬ空家の棕櫚咲けり
要栄かなめゆ吾が家新築然として
葛餅に頁の耳を折りて立つ
むしむしとする日を咲きて夏みかん
万緑に抑へ込まるゝ一堂宇
掘り出されまじまじ見らるあとずさり
よろよるとじやがたらいもの花へ蝶
あめんばう跳び越しゆけるあめんばう
梅雨到来告げて編集後記かな
十葉に朝の一刻日差しけり
黄楊の花小雨あかるく降りにけり
しやがしやがと著莪にふる雨聴きゐたり
くろぐろと梅雨入の八ヶ岳の大つむり
濡るゝ枝掴み直して梅雨鴉
函強く振つてとり出す梅雨の本
梅雨の月上つてをりぬ家間近
夏富士を語るに静岡弁が出て

白樺の一幹に倚る夏ゆふべ
郭公の連呼絶えざる八ヶ岳は好し
ともかくも郭公を詠みおほせたり
黒揚羽宙より降れる晋山式
征桓立交り咲くねずみもち
曇日を待ちぬしごとく合歡咲ける
鉄線の剪り処ここらと鋏当て
いんげんの白花むつと曇りづめ
だしぬけに降られて泰山木の下
でで虫の当推量が外れけり
花了へしあふひの茎の突つ立てる
なめくぢら砥石溶かしにかりけり
のうぜんあたりにかまはず散りにけり
のうぜんの妄想を詩の糧とせよ
庭土が性に合ひたる移し竹
手に負へぬ赤さのカンナ咲き出して
タツクルに走者潰さる海紅豆
弁慶蟹葎の葉騒に目を上げぬ
驟雨あり大根台地の地味肥やす
皺寄らぬやうに蚕豆茹でるコツ
けふ差して腰に馴染まぬ扇子かな

* 地獄の閻魔の庁にあって死者の生前の行為を映し出すといふ鏡

浄^{じやう}玻璃^{はり}の鏡も曇らむこの暑氣に
黄表紙に凌ぐ暑さも峠越す
朝蟬のじゆげむじゆげむに起き出して
大向日葵^{あざみ}顔^{かほ}を拝^かすごと
塩^{しほ}辛^{から}蜻蛉^{かげろふ}の汚れし翅^{はね}を笑むごとく
翻る芭蕉に雨の五十棒
夏の灯の鯨の本へ乱反射
夜や秋の手にとりてみぬ不審紙

峯雲に見下ろされゐる鮫州駅
どぜう^{佐渡行}捕大佐渡曇り背に負うて
大佐渡の竹灼き尽す日なりけり
照りつける鉄砲鼻に葛灼けて
山^{金山}百合のうへに出でたる狸掘
わめく^{妙宣寺}蟬塚原問答聴くごとし
そよりともせいで巨刹の青すすき
抽んづる赤松蟬を集めをり
漬茄子と佐渡米に食すすむなり
海に入る夕日見守るおけさ柿
木偶の抜く段^{だん}平涼し文弥節
一工夫ありそな花火揚がりけり
空昇りつめてよろめく花火玉
ナトリウム色の花火に顔染めて
パリパリと揚がりズドンと花火了ふ
大玉となりて間合をとる花火
打止めの花火はこれかこの後か¥
終の花火らしき高さにあがりけり
行きあたりばつたりの蟬吾を掴む
夕顔を^{すずめが}天蛾ぶると発ちにけり
あばずれの^{颯風}キテイ上陸せしことも
そはそはと次の風待つ白芙蓉
泥亀の鼻もたげゆく秋風裡
一吹きに鯉魚風葭を鳴らすなり
一遍に阿弥衣はりつく初嵐
起き抜けの鴉の横紙破りかな
はつはつと山車倉の上に鴉鳴ける
内祝鶏頭の莖色づきて
水引の際立つ方へ目を遣りぬ
花の名をそこそこ覚え田村草

コスモスの脇をぶると馬体過ぐ
八つ頭馬鹿丁寧柴屋寺に洗はれをり
天柱山その脇山の紅葉かな
自然薯の包引つ提げ長身に
そろそろと野老黄葉の竹のぼる
呆けし実を三つ四つ残しやぶめうが
拾得じつとくの笑ふがごとく裂け石榴
そそくさと蛇穴に入る海蔵寺
不可思議光放つ石榴の暮れずあり
鴟描き足さばや倪さん空林圖
十五夜三浦三崎の花暮町に灯の入りて
跼み見る露草の露鳴りさうな
穂すすきのほの字程度に解けそめて
種茄子に晴れてまた降る雨のあり
砂蹴つて鯨の子姿くらませり
鬼貫忌平語しつかり使はねば
苦吟してとつてつけたる秋の風
さういへば家紋に似たる柿の蒂
唐辛子ひとりよがりの癖が出て
赤のまま此処らで誰か滑りしか
水引に視力測られゐるごとし
案山子見る男チエツクのシャツを着て
青空に木賊の節を継足せる
草の花鐵路のつくる三角地
背の崩る温知叢書を曝しけり
曝古地されて龍の取り巻く秋津島
庭草の二三供へて十三夜
だぶだぶの身不知柿みしらずに口もてゆけり
大根の形よき葉に旭さし
一段と今朝は冷え込む隼人瓜

藜の実の風味を鴟の熟知せり
卒塔婆のつまさきだてる鴟日和
道なりに下りゆかれよ芒の中
数珠玉を過ぎてずんずん暮るゝ道
畳屋の菊の出来栄えよかりけり
家に居ることにおちつく石落の花
蓮掘のここぞと力入るゝ顔
柿もみぢ柿に根負けして散りぬ
枯木道脇挟む本ぬくとかり
根方まで冬日が当り気さくな木
いちどきに散るを好めるいてふとも
入り組めるいてふの枯枝枯枝に日
ごはんつぶほどのあかるさ冬ざくら
まなうらに駱駝の現るる日向ぼこ
墓地に向き花柄蒲団干せる家
炬燵して芋銭の狐隊行圖
なまこ噛む音こめかみに伝はりて
ちやんちやんこ着て神頼み長かりき
男鹿線男鹿年越吟行に乗りてことと年の旅
一病と年の関越す膝栗毛
悴める掌のかたちして枯柏
逝く年のぼそと暮れゆく男鹿の空
夕凍みのわけでも鯛の鼻柱
上つぱり脱いでしよつづる招ばれけり
これやこの男鹿のしよつづる賞味せむ
しよつづる鍋煮えて飛び交ふ秋田弁
これが彼の秋田音頭の男鹿雷子しよ
なまはげの出る夜を雪の降りしぶる
なまはげのくる夜家中明るうし
お祓真山神社ひの濟みてなまはげ放たれし

なまはげの足踏み鳴らす屋台骨

なまはげの聞きしに勝るおらびごゑ

なまはげのずいと茶の間に踏み込みて

なまはげのもぞと酒盃に手を出しぬ

なまはげの去るを呑み込むうるし闇